

ふのは當らない。尤もその教相が異なる點で別な道だとすれば、それは許されるにしても、唯それだけで直ちに佛説にあらざとすることは出来ない。教相の異なる場合には、偏頗なき覺慧に依り正理を以て隨量し、果して何れが眞に聖教量であるかを確定すべきである。何となれば、諸佛世尊の二諦に依る說法は印定を具し (saṃketa-vat) 密意を具せる教説であるから。即ち、勝義としての說法は、言亡慮絶なる眞如（これが彼にあつては眞の意味に於ける勝義諦）が佛の慈悲を動力因とし言葉を質料因として吾等のために世俗諦として自己顯現せるものである。この世俗諦は、復た實世俗となつて世俗としての說法を邪世俗として對治し已れば言亡慮絶なる眞如としての勝義諦に還歸する、といふ深密意趣を具するからである。

乃ち、聲聞乘の阿含を見るに、そこには四諦十六行相・三轉十二行相の觀法を説き、これによつて解脱すと説くけれども、この阿含は正理に相應せるものではない。何となれば、「これは實に苦の聖諦なり、生も苦、老も苦」云々と説かれてゐるのは世俗としての說法にすぎないからである。即ち唯名無實で苦聖諦ではないからである。従つて唯名無實なる苦を境として「これは苦の聖諦なり」と苦等を觀するを正見となすが、實には苦をありのままに見るのではない。即ち、如實知見ではない。苦の行相を了得するからである。かくて言葉通りに有執する聲聞の正見等の八聖道は勝義としては虚誑であつて道諦たり得ない。即ち、佛の深密意趣にかなわない點で非佛説である。

然るに、大乘に於ては苦等を觀ぜざるを以て正見とする。觀

ずることなき姿にて觀ずる故に、苦の自性を増益し了得するところが無い。従つて苦等は空・無の姿にて一切時にそのまゝ安住する。即ち、大乘の正見等の八聖道は苦等の實相に契合せる (tattva-prayukta) 故に眞實智見であり、正理に相應せる聖教であつて、これこそ佛説であるといふのである。

リルケについて

京大教授 大山 定一

「運命を持たないことが僕の運命です。」詩人はできるだけ體驗から身を引かねばならない。よく引用されるリルケのこの言葉は一般に文學が志同するものと逆なことを示す。偉大な運命、偉大な體驗を持つことが文學にとつては大切なことである。しかるにリルケはこれを否定する。ここにリルケの文學の新しさがある。リルケの文學を評してホイムラーは物理學上の〇から出發してあると言つてゐる。「大膽にどの鳥よりも強く翼を擴げて、高く高く飛翔」する小鳥は最後に「落ちねばならぬ」偉大な運命、偉大な體驗を求めて高く飛翔しても人間は最後に、運命を持たない、自己の中心に落下して、實存の〇に歸らねばならぬ。リルケの詩は繊細、清純、優美であるといふだけではあたらぬ。それはリルケの實存の〇から生れたことを知らねばならない。

しかしリルケは「運命を持たず、體驗から身を引く」と云つても、周圍、社會から全く絶縁した孤獨をうたつてゐるのではない。「オルフォイスに寄すソネット」の中に、詩人をアンテ

ナに比して詠じた一節がある。アンテナは孤獨で、「何もない空に鐵骨だけを聳え」させてゐる。しかしそれは宇宙から絶縁してゐない。「眼に見えない空中の無數の電波」を感じてゐる。詩人の孤獨もアンテナの如く、孤獨であるが故に、かへつて周圍、社會の目に見えない聯關を感じる。孤獨になり、空虚になり、實存の〇にかへることが、かへつて周圍、社會との純粹な聯關を生ずる。これがリルケ文學の本質である。

ここから、藝術を至上として生活を省りみない藝術家、ロダンやセザンヌに彼が魅かれ、また彼自身その道を究極にまで歩んでいつた過程が理解される。彼は「ロダン」の中に、偉大な藝術家をみると、人の踏まない道と同様日常生活が雜草に蔽れて、藝術が全てになつてゐる。藝術家の生活は畸型化され、無になつてゐるといふ意味の事を述べてゐる。

嘗つて、カロッサーはリルケ會見の印象を、「我が家へかつてくるリルケの姿は疲れ果てて家路につく人の姿である。鋭い何處を見てゐるかわからない眼、海の底の眞珠と同じである。水壓に採まれた身體は疲労困憊してゐる」と述べ、更にリルケの詩は「朝の小鳥の囀りの如く無邪氣な歌ではなく、無理に自分の魂を冷いレンズに集め、その焦點が自ら熱を發して燃えるやうだ」と評してゐる。詩人カロッサーの眼を通じて映つたリルケの姿はリルケの眼に映じたセザンヌの姿に酷似してゐる。「回想のセザンヌ」にリルケはいふ。セザンヌは老いて病身であり、毎日日の暮にはアトリエから、失神しさうになる程疲れて家路につき、村の子供達からは笑ひはやされ嘲られ、や

つとたどりついた家で、味もわからぬ夕食のパンを喉におし込んで寝てしまふ。こんな生活のセザンヌは、しかし、敷布の上に家政婦の見失つた例のリングや酒壺や有り合せのものを置き並べ、さういふものに彼の「聖者」を見た。彼の生活は「仕事の大」であつた。この得體の知れぬ主人に仕へる老犬であつた。

リルケの生活もセザンヌ以上の窮乏のどん底に至つたことは「マルテの手記」の中に到る處見ることが出来る。パリーの街々をうろつくマルテは浮浪者、乞食、慘な者ばかりが目につく。ある時街角に、凍えて指も満足に開かない手にちびた鉛筆を持つてさし出す老乞食女の姿から、自分の明日の姿を豫言されるかのやう感にずる。リルケの文學はこの窮乏のどん底に、實存の〇に、「冷いレンズ」に集められた彼の魂の焦點の發火である。

「ドワイノの悲歌」に輕業師の少年をうたつた詩がある。町はづれの街道に絨氈を敷いて、とんぼがへりしてゐる輕業師の少年、絨氈はすりきれ、僅かばかりの觀客がとりまいてゐるだけである。少年は親方に命ぜられるままにとんぼがへりする。足が痛くなつてもとんぼがへりを繰り返してゐる。そしてその顔には強ひられた微かな微笑を浮べて、見物人に無理に愛嬌をふりまいてみせる。ふと見物人の背後に母親を認めて目頭に涙を浮べる。

「天使よ、天使よ、この藥草の花を摘め。
花瓶をもつて來て この花をさそ。

その花瓶に Subrisio-Saltat (舞踊家の涙) と書きつけて、それを大事に護れ。」

苦痛をこらえたとんぼがへり、偽りの微笑、少年の眞實は只目頭の涙のみである。これほど大きな偽りがあらうか。これほど大きな眞實があらうか。偉大な運命、偉大な體驗をいくら人間が表現しようとしても、所詮我々人間には偽り、模倣をい

ない。貧しい、藝にもならぬとんぼがへりしかできない人間……しかし、この貧しさ、つまらなさ、とるに足りなさは、それ故にかへつて人間の眞實であり、實存であり、美であるのだ。「貧しさは内部から射す光」であり、「永遠の空なる星が美しいのでなく、人間の頭に一瞬映じた星の姿が美しい」のである。

昭和二十六年度 大谷大學文學部(専門課程)開講學科目及講義題目

學科 講義題目 擔當者 毎週單 備考

眞宗學第一講座

普通 眞宗學概論 正親教授 二四

眞特殊 淨土の菩提心 武生講師 二四

宗講讀 教行信證(信證卷) 正親教授 二四

(學同) 論 註 日野講師 二四

演習 和 讚 正親教授 二一(舊制)

眞宗學第二講座

普通 三經概説 名畑教授 二四

眞特殊 本願に於ける諸問題 日野講師 二四

宗講讀 教行信證(教行卷) 名畑教授 二四

(學同) 選 擇 集 武生講師 二四

演習 安 樂 集 名畑教授 二一(舊制)

眞宗學第三講座

普通 七祖概説 稻葉教授 二四

眞特殊 教行の交際 大須賀講師 二四

宗講讀 教行信證(眞化卷) 稻葉教授 二四

(學同) 玄義分 藤原講師 二四

演習 大無量壽經 稻葉教授 二一(舊制)

佛教學第一講座

普通 原始佛教の教義 舟橋講師 二四

眞特殊 賢聖論 佐々木(現)講師 二四

教講讀 俱舍論業品 舟橋講師 二四

(學) 演習 梵文俱舍論疏破我品 舟橋講師 二一(舊制)

佛教學第二講座

普通 佛教學概論 山口教授 二四

佛特殊 唯識の諸問題 富貴原講師 二四

教特殊 清辨の教學 野澤講師 二一(舊制)

講讀 The conception of Nirvāṇa 野澤講師 二四